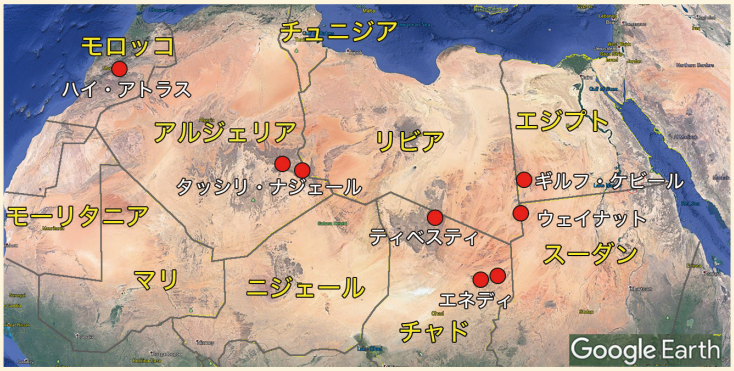
サハラに眠る先史岩壁画
SAHARAN ROCK ART







世界最大の砂漠　サハラ砂漠には「緑のサハラ」と呼ばれる時代がありました。およそ11,500年前から5,000年前頃まで、サハラは緑に覆われていました。様々な民族が豊かな土地を求めてやって来て、彼らは自然の岩肌をカンバスとして彩画や線刻画など独自のアートを遺しました。

サハラ岩壁画に先行するラスコーなどヨーロッパ後期旧石器時代の洞窟壁画では写実的な動物画がほとんどで、人間が描かれることがあっても多くは単純化された図形です。これに対してサハラ岩壁画は、終末期旧石器時代から新石器時代のものですが、動物ばかりでなく人間の様々な姿が描かれています。主題は日々の営みから精神世界まで幅広く、サハラ岩壁画は人間とアートの発展過程での重要な進化を示しています。

サハラ岩壁画は遠く隔絶された土地にあります。展示される作品はすべて実物大であり、実際の岩壁画を目の前にした感動を共有していただければ幸いです。　　英　隆行

01　白い巨人と祈る人々　515x308cm

タッシリ・ナジェール (アルジェリア)

狩猟民の時代、円頭人様式

頭に角のような突起を持ち、大きな力こぶと巨大な陰嚢を持った3mを超える巨人。その左右にはお腹の大きな妊婦が横たわり、左側には祈るような仕草の女性たちが並んでいる。受胎や安産の祈願とも受け取れる。これらの人物は羚羊の絵の上に重ね描きされている。人物の頭が円く描かれていることから円頭人様式と呼ばれている。

サハラ岩壁画は、奥深い洞窟ではなく、写真のように風化で削られた砂岩の岩陰に描かれている。岩壁画自体の年代は現在の技術では測定できないが、この遺跡では約8,000年前の遺物が出土している。しかし、岩陰遺跡は外部に開かれていて、出土品と岩壁画との関連性は弱く、年代特定の決め手にはならない。



02　瘢痕文身のある人物　103x180cm

タッシリ・ナジェール（アルジェリア）

狩猟民の時代、円頭人様式

人物の身体には、皮膚を傷つけて描かれた瘢痕文身が見られる。首飾りや腕輪をまとい、仮面のようなものを被って踊っているようにも見える。着飾っていることから、何らかの儀式かも知れない。また、古い絵の上に別の絵を描く重ね描きが見られる。この絵では、人物の上に白い動物が描かれている。

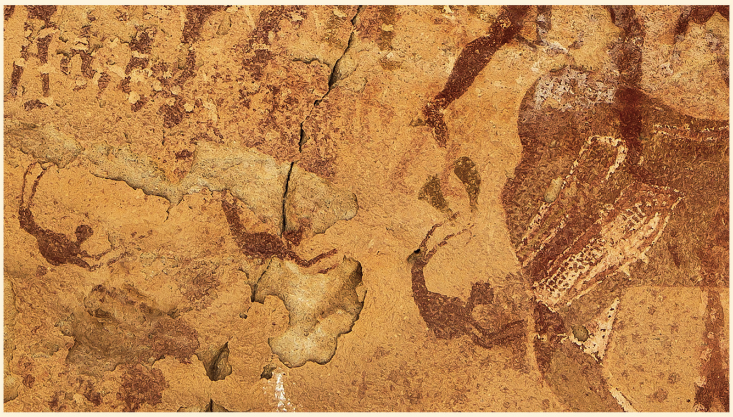


03　泳ぐ人　412x200cm

タッシリ・ナジェール（アルジェリア）

狩猟民の時代、円頭人様式

下側の人物は川で泳いでいるように見えるが、上に描かれた等身大の人物は空中を浮遊しているようにも見える。遠近法のない時代の絵であり、同じ水面で泳いでいる状態を描いたとも考えられる。頭の突起は羽飾りか角か、あるいは別のものだろうか。E.デニケンが宇宙人とみなしているのは荒唐無稽だが、不思議な世界観を持っている。



04　泳ぐ人の洞窟　206x160cm

ギルフ・ケビール（エジプト）狩猟民の時代

映画「イングリッシュ・ペイシェント」のモデルとなった遺跡。ハンガリーの探検家L.アルマシーが1933年に発見し、「泳ぐ人の洞窟」と名付けたが、泳いでいるのかどうかについては議論もある。泳ぐ人の隊列は、「頭のない獣」に向かって飛んでいるようにも見えるが、死後の世界の描写とする説もある。Caveが日本語では洞窟と訳されているが、実際にはほとんど奥行きのない岩陰にすぎない。

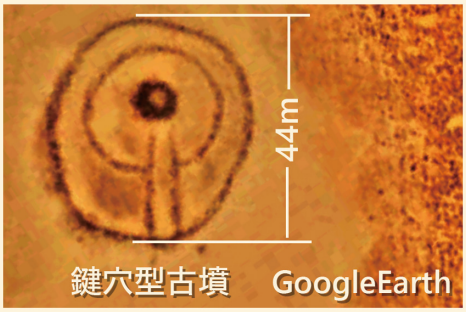
制作年代について

サハラ岩壁画では壁画自体の年代を直接測る技術が現時点では存在しない。絵具に木炭や接着剤などの有機物が含まれていないため放射性炭素年代測定ができない。また、洞窟壁画のように水が滲みだして絵の上に炭酸カルシウムの被膜が形成されることがないためウラン系列年代測定もできない。

直接的な測定ができないため、相対的、間接的に制作年代を区分する。先史岩壁画に多く見られる重ね描きは相対的な年代を特定する重要な手がかりとなる。また、絵の様式を分類し、様式ごとに家畜の有無や種類を分類する。サハラが緑化した1万年前頃、最初に来たのは南からの狩猟民族だ。次に、東から牛飼いの牧畜民が来た。7,000年前から6,000年前にかけてサハラ各地で牛が飼われるようになる。しかし、5,000年前頃から再び乾燥化が始まり、徐々に牛が飼えなくなった。ウェイナットなど東部では5,000年前頃、中央サハラでは4,000年前頃には牛が飼えないほど乾燥化が進んだ。その後、馬の時代(3,500年前 - 紀元頃)、ラクダの時代(紀元以降)へと続く。しかし、エネディなどサヘル(サハラ南縁部)に近い地域では乾燥化が緩やかで、壁画上では牛とラクダが共存している。

サハラ岩壁画の年代研究では、最近になって大きな成果があった。アマチュア研究家が、イヘーレン様式の岩壁画の分布と鍵穴型古墳の分布がほぼ一致することを発見し、古墳の遺物から約5,000年前の数百年の間中央サハラにいた民族が作者であるとの説を発表した。これは、膨大な量の衛星写真(GoogleEarth/BingMaps)を隈なく探索して、鍵穴型古墳の分布を調べた成果だ。イヘーレン様式の岩壁画には白人系民族が描かれているが、埋葬遺骨のDNA鑑定が行われれば彼らの出自も判明するものと期待される。

サハラでは未調査地域が多く残っており、今でも新発見が続いている。しかし、当事国の協力が得られにくい現実もある。加えて、政情不安やテロリスクのある地域が多く、近年は入れない地域が増えている。平和な時代が待たれる。





05　弓矢で戦う人々　146x100cm

タッシリ・ナジェール（アルジェリア）牛の時代

タッシリ・ナジェールには戦争図が数多く描かれている。どの戦争図でも、激しい戦いはあっても倒れている人物が描かれていないのは作者の願いなのだろうか。狩猟採集時代での集団間の戦争を示す考古学的事実は、中石器時代の例外的な事例を除いて見つかっていない。農耕や牧畜が始まった新石器時代に入り、土地や家畜などをめぐる争いから集団間で戦争が発生したものと考えられている。



06　食肉解体　146x103cm

タッシリ・ナジェール（アルジェリア）
牛の時代、白人系牧畜民、イヘーレン様式

ブーメラン状の道具（ナイフ？）を使って食肉を解体する人々。男性は腰みのだけだが、女性は長いスカートに肩掛けのようなものを羽織っている。人々の周囲には、野うさぎやキリンなどの野生動物と牛、羊、山羊などの家畜がいる。白人系牧畜民は、5,000年前頃の短い期間この地域にいたとの説が有力。（前ページ囲み記事参照）



07　愛の館　200x103cm

ティベスティ（チャド）牛の時代

草原では牛や羊が草を食み、男たちは牛の乳しぼりをしている。のどかな田園風景の中に一軒の家がある。入口の縄暖簾をくぐると、部屋の中には裸の男女が集っている。女性は足を白く塗っているようだ。右端の男は楽器を奏でているように見える。部屋には大きな壺があるが、中には酒が入っているのだろうか。重なり合っている男女もいる。女や男を奪い合っているようにも見える場面もある。



08　整列する戦士たち　146x103cm

エネディ（チャド）鉄器時代

繊細な筆遣いで細かく描写された岩壁画。戦士たちは槍を手に持ち、頭には羽飾りを付けている。戦士の隊列から外れた場所には長いスカートをはいた女性もいる。槍の穂先が石で加工するには難しい長さであることから、鉄製の穂先と推測されている。鉄器製造は、東のヌビア（スーダン）で紀元前500年頃には盛んになり、西に伝播してエネディに伝わったようだ。小さな製鉄跡の遺跡をあちこちで見かける。



09　行進する人々　146x103cm

ウェイナット（スーダン）牛の時代

川岸で垂直に削られた砂岩の表面に10メートル以上にわたって夥しい数の絵が描かれている。この場面では、人々が何かに向かって歩いているようだ。行進する人々の絵に重ねて四つ足の動物が描かれている。別の場面では、狩りをする人々、牛の群れなどが描かれている。この地域では、牛の牧畜は7,000年前頃に始まったが、5,000年前には乾燥化によって牛が飼えない気候になった。





線刻画

サハラ岩壁画では岩を刻んだ線刻画はそれほど多くはないが、垂直や水平の岩の多い河原などに集中している。題材は、彩画と同じように人間や動物も多く描かれているが、彩画にはほとんど見られない幾何学模様が多いのが特徴的と言える。特に螺旋や同心円が多く、サハラ全域で見られる。縄文土器の模様に通じるものが感じられる。

10 牛飼い 412x245cm

エネディ（チャド）牛の時代

身体中に幾何学模様が描かれたニオラ・ドアの線刻画は、この土地の狭い範囲でしか見つかっていない。杖を肩に担ぐポーズは牧童特有のもので、現代でもよく見かける。しかし、お尻の大きな体形は、現在この地に暮らすほっそりとしたトゥブ一族のものとは異なる。

11 太陽の円盤 103x140cm

ハイ・アトラス (モロッコ) 青銅器時代

古代ベルベル人が信じたアニミズムでは、「太陽、土地、水」が人間に不可欠なものとされていた。太陽の内側には、山並みに囲まれた大地と川。ハイ・アトラスの山々に囲まれた、標高2,000メートルを超えるヤグール高原の風景そのものだ。太陽の下に描かれた小さな円盤は月のようにも見える。



小川で水を飲む牛



Le Muséum national d'Histoire naturelle

12 イヘーレン岩壁画 実写: 824x270cm 模写: 840x248cm

タッシリ・ナジェール （アルジェリア） 牛の時代、白人系牧畜民、イヘーレン様式

サハラ先史美術の最高傑作

「サハラ砂漠で発見された壁画で最も優れた作品。新石器時代写実派の代表作」（フランスの考古学者アンリ・ロート）と賞賛された美しい壁画だ。

ロートは、発見翌年の1970年に調査隊を組織し、実物大の模写を制作した。実際の壁画は、長い歳月を経て退色や埃の堆積などで肉眼では見えにくくなっている部分が多くあるが、模写により細部まで読み取ることができる。

今回の展示では、フランス国立自然史博物館-人類博物館の協力を得て、模写全数を実物大の写真で展示する。

サハラ遊牧絵巻

模写を見ると、壁画全体がひとつの構図に収まって調和が取れていることに気がつく。驚くことに、日本の絵巻物や屏風絵のように物語を構成している。

物語は右から左に向かって進む。右端ではキャンプをたたみ、移動の準備をする人々。その先には、子供を抱いて歩く男と牛の背に乗って移動する女。途上にはキリンやガゼルなど野生動物の群れ。新しい土地に着くと、男たちは荷を解き、女たちはテントを設営する。先着した人々はテントの前に集い、壺からストローでビールを飲みながら団らんのひと時。人々の髪型や衣服も驚くほどオシャレだ。新石器時代の遊牧民の生活が、余すところなく見事な筆遣いで描かれている。

英 隆行写真展

HP: http://hanafusa.info/
Mail: hana52@osaka.email.ne.jp

目黒区美術館
区民ギャラリー
2022/10/5(水)-10(月)
10:15-17:45(最終日14時)
入場無料

助成・協力・後援（順不同）
片倉もとこ記念沙漠文化財団
フランス国立自然史博物館
SCREENグループ、エムズシステム
アルジェリア大使館、日本アルジェリア協会
アフリカ協会、世界遺産アカデミー

©T.Hanafusa May 2022